

小地名を手がかりにした 集落の環境認識に関する基礎的考察

窪田 圭佑¹・二井 昭佳²

¹ 非会員 国土館大学大学院工学研究科 建設工学専攻 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: s7me204e@kokushikan.ac.jp

² 正会員 国土館大学理工学部 准教授 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: nii@kokushikan.ac.jp

本稿は、神奈川県愛川町の半原地区を対象に、552 個の小地名を語尾分類し小地名図を作成した上でその傾向について考察するとともに、最も多い「山」地名に着目し地名の指す地形と集落から見た地形透視図の関係について分析したものである。その結果、半原地区の小地名は 4 割が自然語彙で、なかでも「山」地名と「沢」地名が多く存在していること、小地名図の分布状況から沢が半原地区の集落にとって重要な存在であること、また、「山」地名は 5 つの地形タイプに分類でき、集落からの山の透視形態との関係から、地区の広い範囲、ある特定の集落のみ山の透視形態が得られるもの、いずれの集落からも山の透視形態が得られないものがあり、同じ「山」地名でも認識される集落の範囲が異なっていることを示唆した。

キーワード: 地名, 集落, 環境認識, 愛川町, 半原地区, 山の透視形態, 地名の領域, 山

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

地名はその土地に住む人々が、土地の特徴を捉え、必要に応じて名付けていったものであり、その意味で地名は場所への環境認識があらわれた貴重な資料だといえる。

近年では小さな地名は急速に消滅してきている。しかし小さな地名にこそ、集落の環境認識が現れているといえ、人間の環境認識を探る上でも分析する意義は大きい。

これまで地名に関する研究は膨大にあるが、中でも本研究に特に関連するものとして、笹谷らによる農村集落の民俗空間構成に関する研究¹⁾がある。これは神奈川県高津区久末の小字を対象に地形・水系・道路といった項目で分類した上で、地形の形状認識と地名の関係などを分析することで集落の環境認識について考察しており、興味深い結果が示されている。本研究では、こうした先学に学びつつ、地域で用いられてきた小地名に注目する。

そこで本研究は、神奈川県愛川町の小字より小さな地名(本研究では小地名と呼ぶ)を対象に、①対象地名を地形や水系といった語尾により分類した上で、それらの小地名を地図にプロットし、その傾向を把握する。②小地名のうち山名が付与されたものを対象として、対応地形と透視形態の関係性について分析し、③集落の環境認識について考察することを目的とする。

(2) 研究の対象と方法

研究の対象地は神奈川県愛甲郡愛川町の半原地区とする。(図-1) その理由は、①愛川町は古代より集落が形成された地域であり興味深い地名が多数存在していること、②愛川町文化調査会が1985年に聴き取り調査により小字や小地名をまとめた貴重な資料「あいかわの地名 半原地区」²⁾が存在していることによる。この資料には小字30地名と小地名552地名が、由来や具体的な位置とともに掲載されており、これらの地名を研究の対象とした。

研究の方法は、まず2章で「あいかわの地名 半原地区」に記載された小地名を地名分類の方法³⁾に従い分類した後に、字限図⁴⁾などを用いて一万分の一の地形図⁵⁾にプロットすることで小地名図を作成し、地名の分布傾向などを把握した。3章では小地名のうち数の多い山名が付与された地名に注目し、地名が指す地形の特徴を把握した上で、地形CGによる透視形態と対称させ、その関係性について分析した。



図-1 愛川町全図

2. 半原地区における小地名の特徴

(1) 語尾分類による小地名の傾向

地名は、その場所の地形や地物を示す語尾と、規模や形、位置や所有者を示す語頭から構成されるが、本研究では語尾に注目し、分類をおこなった。

具体的には、「あいかわの地名 半原地区」に記載された小地名 552 地名について、笹谷の地名分類表¹⁾にしたがい分類した(表-1)。なお、地名は大きく3つに分けられ、山や川といった人が手を加えていない地形を指す自然語彙、道や建物、農地といった人の活動によって生まれた場所を指す社会語彙、そして位置や方位、大きさなどを指す補助語である。

分類の結果、552 小地名のうち、自然語彙は 245 地名 (44%)、社会語彙は 173 地名 (32%)、また補助語 56 地名 (10%)、その他 78 地名 (14%) となった。なおその他の地名には「止まる、飛び」といった動作を指す地名や「えぐろ、だらり」といった由来が不明とされる地名や「弘伝坊」など人の名前が地名となった場所などがあった。補助語は位置に関する「上、下、場」などがあった。

自然語彙の内訳を見ると、245 地名のうち、地形に関わる地名が最も多く、全体の 5 割を占めている。次に多い水系を加えると、地形と水系でほぼ 9 割を占める結果になった。地形の中で最も多かったのは山で、31 地名あり、次に原 20 地名、平 17 地名となった。水系では沢が最も多く 40 地名で、沢と同じ地形を表す谷は 1 つであった。

社会語彙の内訳をみると、交通地名 4 割・信仰地名 2 割・耕地地名 2 割・集落地名 1 割となった。交通地名は、坂 31 地名、道 30 地名で、両者で 9 割を占めている。信仰地名の 37 地名は寺や堂、神社といった小地名である。次に多かった耕地は 33 地名であり、そのうち 23 地名が畑の小地名である。地名数は少ないが、災害や葬送に関する忌地名が 9 地名存在した。具体的には、「焼場跡」が 5 地名あり、その他に「崩れ」や「出し」といった土砂崩れによって付けられた地名が存在した。

(3) 小地名図の作成方法

「あいかわの地名 半原地区」に記載された小地名の地番や地形の特徴を読み取り、字限図(図-2)も用いて、一万分の一地形図をベース図とする小地名図を作成した(図-3)。なお小地名図には、全 552 地名のうち、場所が判別できない地名や場所が記されていない地名を除く 387 地名 (7 割) をプロットすることができた。

(4) 小地名図から見た小地名の特徴

作成した小地名図を地名の領域や分布状況に注目してみると、大きく 3 つの特徴が見てとれる。

ひとつは、小地名の指す領域の大きさは大小様々である点である。たとえば、同じ「原」地名でも、小字名が冠された「野中つ原」や「市之田原」など広い範囲を指すものもあれば、「塚原」や「門原」のように狭い範囲を指すものが存在している。

ふたつめは、小地名の領域のなかにさらに小地名が存在し、地名が入れ子状になっている点である。先にあげた「野中つ原」を例に挙げると、その領域内には「平四郎畑」や「四反畑」「越原」などの地名が存在しており、必要に応じて細分化して認識している様子が伺える。

3 つめは、小地名は地区内に一様に分布しているのではなく、特定のエリアに集中している点である。とくに半原地区には台地を切り裂くように 5 つの沢が存在している特徴がみられるが、このうち宮沢の両岸と、深沢と細野沢に挟まれたエリアに地名が集中するなど、当然ではあるが集落近傍に地名が集中する傾向が見られる。

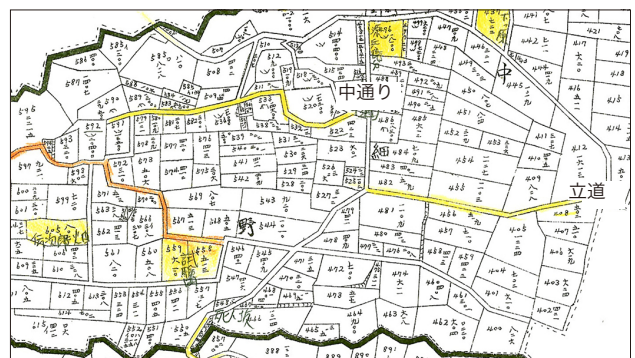


図-2 字切図 小字中細野

表-1 語尾分類表

自然語彙 245 個 44.3%						社会語彙 173 個 31.4%						補助語 56 個 10.2%			不明 78 個 14.1%		
地形 130 53.0%		眺望 1 0.04%	水系 85 34.6%	日照通風 3 1.2%	表土材料 15 6.1%	植生 11 4.5%	城館 2 1.2%	交通 68 39.8%	耕地 33 19.3%	集落 24 14.0%	信仰 37 21.6%	忌地 9 5.2%	位置 55 98.2%	規模 1 1.8%	新旧 0 0%	動作・動物・ 意味・平仮名など	
山 31 原 19 平 17 窪 9 掘 7 崖 5 尾根 4 曲がり 3 段 3 塚 3 久保 3 尾 2 丸 2 野 2 棚 2 畔 2 緑 2 谷 1 穴 1 越し 1 久保 1 堤 1 基盤 1 河原 1 台 1 峠 1 鼻 1 舟 1 岸 1	見 1	沢 40 淵 22 滝 5 瀬 5 堰 4 河原 4 水 2 川原 2 溝 1	暗 1 夕日 1 穴 1	石 10 岩 5	松 4 木 3 林 2 芝 1 栲 1	小屋 1 二の丸 1	坂 31 道 30 通り 4 橋 2 通し 1	畑 23 田 3 割 3 田圃 2 耕地 1 苗代 1	屋敷 14 村 7 会 2 家 1 鳥居 1 地蔵 1 虎神様 1 守護神 1 若宮 1	寺 8 森 7 神所 6 堂 5 神社 2 神 2 山王 1 宮 1 鳥居 1 地蔵 1 虎神様 1 守護神 1 若宮 1	焼場跡 5 崩れ 1 出し 1 取らず 1 墓 1	場 13 元 8 上 7 尻 7 下 6 口 3 先 2 中 2 横 1 前 1 境 1 内 1 出口 1 向う 1 向こう 1	幅 1		止まる 立 開き 蛙っ子 弥五助 六兵衛 ゆうたん やんき		

一方、個別地名に注目すると、40 地名ある「沢」地名では、基本的にはひとつの沢筋に一つの地名が付けられているが、台地上を流れる4つの沢では、沢をさらに分割するように地名が付けられている。なお、火葬場跡の多くは、こうした沢の上流部に分布しており、集落と沢の深い関係を示しているように思われ興味深い。また、同数存在している「道」と「坂」に注目すると、当地区は全体的に傾斜した地形であるが、沢筋に降りる道のみが

「坂」と名付けられており、かなりの急勾配の道のみが坂と認識されている。この「道」地名の中には、「立道」が4つ存在しているが、いずれも台地上で地形勾配に沿った道を指しており、「縦」という方向感覚によるものだと推測される。

最後にもっとも地名数が多かった「山」は、小地名図を見ると必ずしも山頂を指しているわけではないことから、3章で詳しく考察することとする。

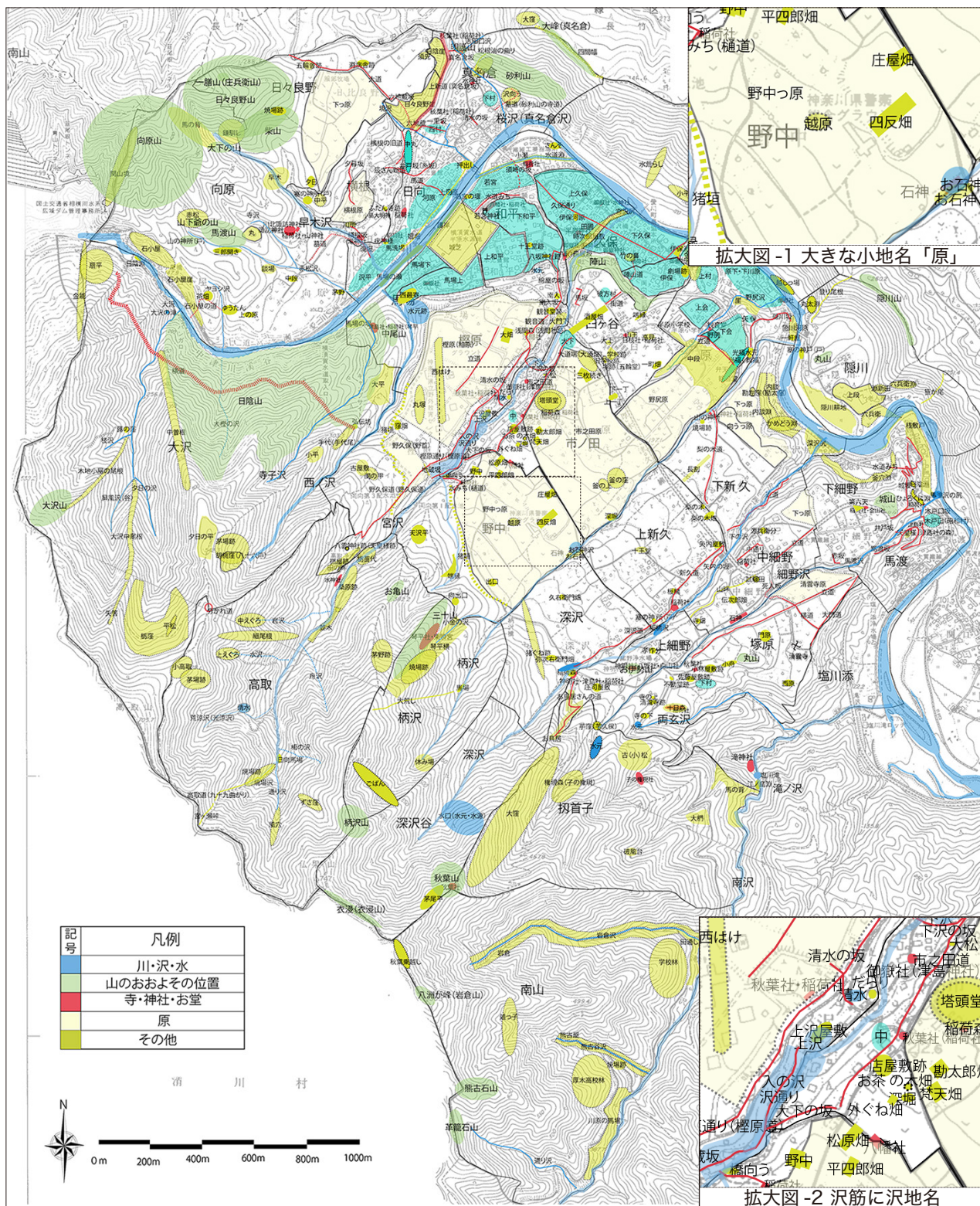


図-3 半原地区 小地名図

3. 小地名「山」における集落の認識

(1) 分析の視点と方法

半原地区の「山」地名は、半原地区の「山」地名は31地名存在している。しかし、国土地理院の地図ではそのうち仏果山と高取山の2地名しか記されていない。

また、2章で指摘したように「山」地名は必ずしも山頂を指しているわけではない。

そこでまず、地形図を用いて「山」地名の指す地形の特徴を把握する。その後、地形CGにより、代表的な集落から見た透視形態を作成し、地形と透視形態の関係について考察する。地形CGの作成方法は国土地理院が公開している基盤地図情報の5mメッシュ標高データを用い地形3Dソフト「カシミール3D⁶⁾」により、人の視点2mの位置から地形透視図を作成し、集落からの山の地形の見え方を分析する。集落の位置としては図-5の代表的な集落の7集落を対象とする。

(2) 「山」地名の対応地形の特徴

31地名の地形の特徴を把握した結果、表-3のように山頂を指す地名は3割(9地名)しか存在しなかった。図-6のお亀山のように尾根の一部を指すものが8地名、図-7の「山下爺の山」や「馬渡山」のように山の斜面の一部を指すものが8地名、図-8の「丸山」のように小高い丘を指すものが3地名、図-9の「陣山」のような台地の斜面を指すものが3地名だった。このことから半原地区では、5種類の地形に対して「山」地名が付与されて

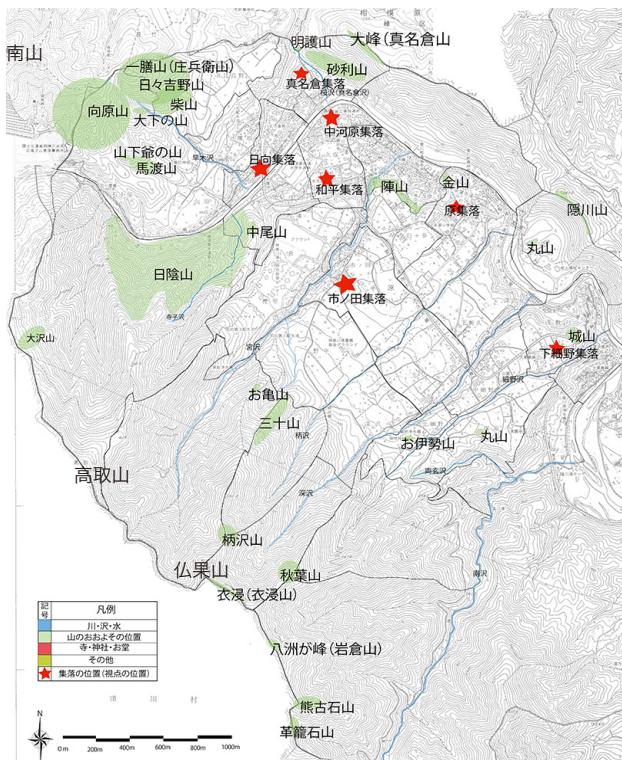


図-5 集落の位置と地形

表-3 山の地形と見える位置と場所

山頂	9	隠川山、柄沢山、大峰(真名倉山)、革籠石山、熊古谷山、八州が峰(岩倉山)、高取山(大高取)、仏果山(大尖山)、向山
尾根	8	大沢山、明護山、お亀山、中尾山、日々良野山、布浸(布浸山)、秋葉山、向原山
山の斜面の一部	8	日陰山、三十山、大下の山、馬渡山、山下爺の山、柴山、砂利山、一膳山
小高い丘	3	お伊勢山(大神森・お伊勢森)、丸山、丸山
台地の端	3	城山(隠居城)、金山、陣山(陣屋の山)
	31	



図-6 尾根の一部



図-7 山の斜面の一部



図-8 小高い丘



図-9 台地の端

いることがわかった。

そこでこれら5つについてそれぞれの山の見え方の違いについて分析する。

(3) カシミールでみた山の透視形態

a) 尾根の一部(図-10~12)

尾根の一部を指す山は8地名あり、それらに対して先に設定した7集落からカシミールを使用してCGを立ち上げ分析した結果、集落から得られる山の透視形態は大きく2つに分類できることがわかった。

ひとつは、多くの視点では尾根の一部にしか見えないが、特定の視点の山としての透視形態が得られるものである。その特定の代表的な地名は「お亀山」と「秋葉山」である。「お亀山」の特徴は上細野集落や日向集落からは尾根の一部の図-10上側のようにしか見えないが、お亀山の麓にある市ノ田・原・中河原集落の3集落からは図-10下側のように左側の尾根があたかも山の稜線を成すように見え、山の形が際立って見える。同様に秋葉山は、図-11上側のように市ノ田集落より東の集落からは尾根の一部にしか見えないが、下細野集落からみると山の形が際立って見える。また、秋葉山には細野集落が祀る秋葉社がある。この山の近くには秋葉社の「お鳥居さんの道」と「お鳥居」があり、秋葉山からのびる尾根上には「お鳥居さんの道」の秋葉山に登る道がある。より山に近い上細野集落からは、さらに山としての透視形態が際立っている。

ふたつめは地区の広範囲から山としての透視形態が得

られるものである。具体的には日々良野山や向原山である。この二つの山は地形図上では南山の尾根の一部となっているが、図-12に示すようにそれぞれが独立した山のように見える。なお、両者ともに小字の名前が山名に冠されているが、地名の広範囲から山と認識できることが関係している可能性がある。

b) 山の斜面の一部 (図-12)

山の斜面の一部をさす「山」地名は8地名あり、同様にCGにより分析した結果、いずれも山としての透視形態をなすものは存在せず、透視形態でも斜面の一部となっていた。事例をあげると図-12のように「一膳山」や「柴山」は「日々良野山」の斜面の一部でしかない。斜面の一部を指す、「山」地名のはいずれも「一膳山」のように所有者の名前か、柴山のように土地利用に基づく地名となっている特徴がみられる。

c) 小高い丘

小高い丘をさす「山」地名は3地名あり、丸山やお伊勢山で離れた集落からは周りの山と同化して山には見えないが、近くからみると山の形が際立って見える。(図-13) また、お伊勢山には神明社が祀られている。

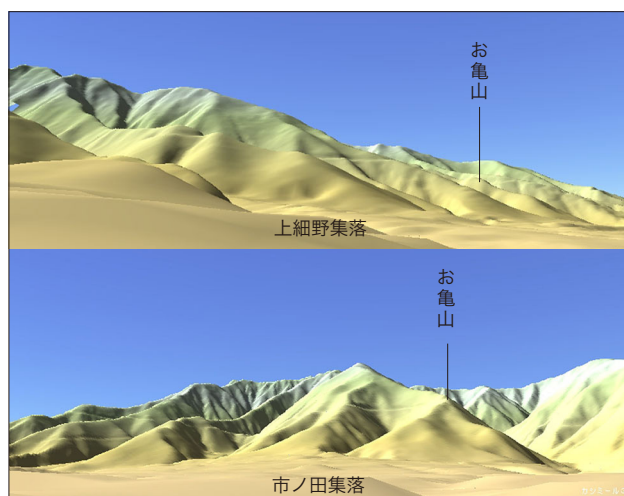


図-10 尾根の一部 お亀山の見え方

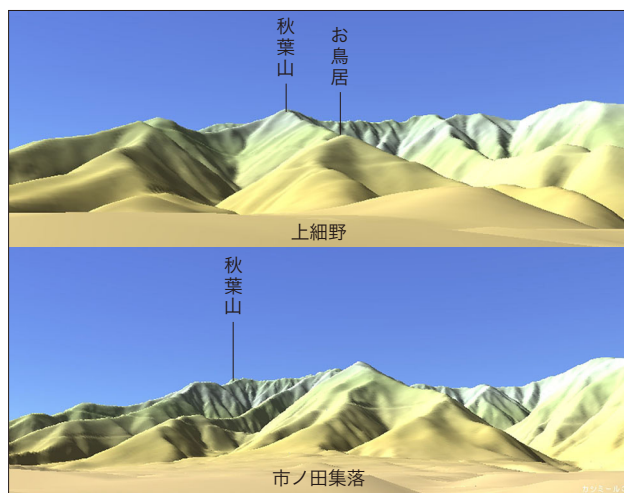


図-11 尾根の一部 秋葉山の見え方

d) 台地の端

台地の端を指す「山」地名は3地名あり、台地の下に位置する中河原集落からは山の透視形態が得られる(図-14)。これは、台地が飛び出している地形に「山」地名がつけられていることが背景している。

e) 山頂

山頂を指す「山」地名は9地名あり、仏果山(大尖山)のようにほとんどの集落から山頂が視認されるものと、いくつかの集落でしか視認することができないものがあるが、視認できる場合はいずれも山頂としての形が確認できた。(図-15)。

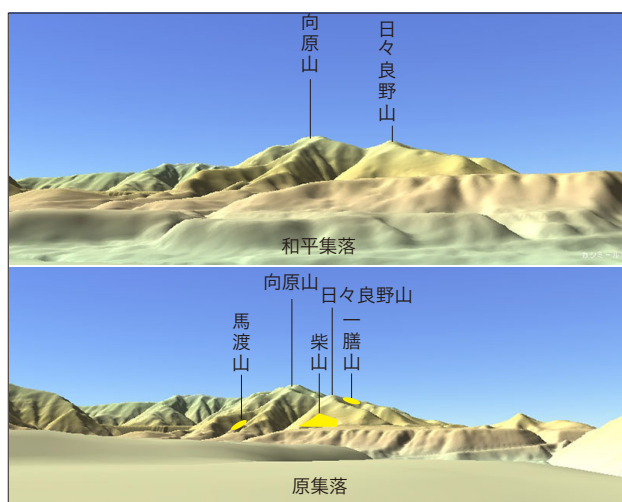


図-12 尾根の一部・山の斜面の一部

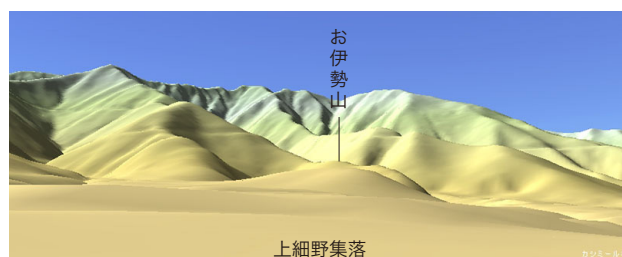


図-13 小高い丘 丸山の見え方

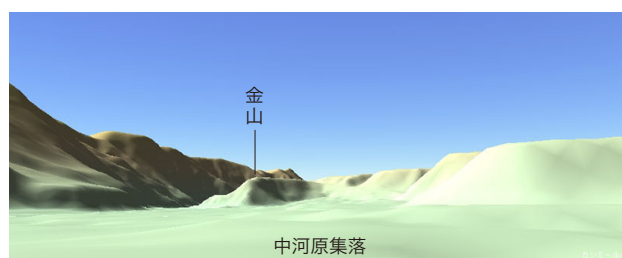


図-14 台地の端

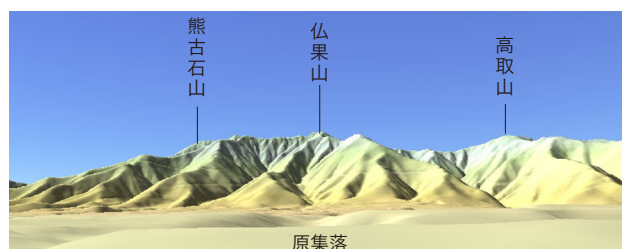


図-15 山頂

(4) 地形と集落からの透視形態からみる

「山」地名 31 地名のうち、地名の指す地形の特徴は 5 つに分類でき、その地形の違いが集落から得られる山の透視形態の違いと対応することがわかった。具体的には、地区の広い範囲から山の透視形態が得られるもの、ある特定の集落からのみ山の透視形態が得られるもの、どの集落からも山の透視形態が得られないものの 3 つのパターンが存在した。

まず、地区の広い範囲から山の透視形態が得られるものには、山頂を指す「山」地名と、尾根の一部を指す「山」地名の一部であった。そのなかでも、「仏果山」はほぼ全ての集落から山の透視形態が得られ、地区全体で山と認識できることが地形図での記載につながっていると思われる。また、尾根の一部ではあるが、広範囲で山の透視形態が得られる向原山と日々良野山は、いずれも小字名が冠されていることから、地区の広い範囲で集落の山として認識されていたと考えられる。

また、ある特定の集落から山の透視形態が得られるものには、尾根の一部、小高い丘、台地端を指す「山」地名が該当しているが、これらはそれらの集落で命名され使用されてきたものだと考えられる。とくに、秋葉山やお伊勢山のように信仰に関わる山や、お亀山のように山の透視形態が命名根拠になっているものが見られるのも特徴だといえる。

最後に、いずれの集落からも山の透視形態が得られないものは、斜面の一部を指す「山」地名であった。これらは、所有者の名や土地の利用方法を冠した「山」地名であることから、それらを利用する山麓の集落で命名され、使用されてきたものだと考えられる。

以上の結果から小さな地名にこそ半原地区の一つ一つの集落の人々の暮らしに重要な役割を持っていて、集落ごとの地名の認識の違いや半原地区で共通の地名を分析し、地名の認識についておこなった。

5. 結論

本研究の成果は以下の通りである。

- ・半原地区の小地名 552 地名について語尾分類をおこない自然語彙や社会語彙を把握した結果、半原地区では地形と水系で自然語彙の 9 割を占め、特に沢地名と山地名が突出して多いことを明らかにした。
- ・1 万分の 1 地形図をベース図とする半原地区小地名図を作成した。
- ・これをもとに地名の領域や分布状況に注目した結果、小地名が持つ大きさは大小様々であること、小地名が入れ子状に存在していること、小地名が特定のエリアに集中していることを指摘した。また、集落の環境認識に関わるものとして、台地上の沢沿いに小地名が多く存在することや沢筋のなかに特定の区間や場所に「沢」地名が付けられていることと、沢の上流部に焼場跡の多くが存在していることから半原地区の集落にとって沢が重要な存在であることを指摘した。
- ・地名数が多かった「山」地名に注目し、地名が指す地名の特徴と代表的な集落からの山の透視形態について分析した結果、「山」地名は山頂・尾根の一部・山の斜面の一部・小高い丘・台地の端の 5 つに分類でき、それぞれの地形に対応して、地区の広い範囲から山の透視形態が得られるもの、ある特定の集落から山の透視形態が得られるもの、いずれの集落からも山の透視形態が得られないものがあることを示し、「山」地名によって認識される集落の範囲が異なっていることを示唆した。

参考文献

- 1) 笹谷康之・中村良夫：農村集落の民俗空間構成に関する研究，日本造園学会研究発表論文集 3,1980.
- 2) 愛川町文化財調査会：愛川町文化財調査報告書 第 19 集 あいかわの地名 半原地区，1992.
- 3) 笹谷康之：地形の意味に関する研究，博士請求論文，1990.
- 4) 全国市町村地図刊行会出張所：神奈川県愛川村，1928.
- 5) 国際航業株式会社調整：愛川町全図 1/10000,1974.
- 6) カシミール 3D は、杉本智彦氏が作成し無償頒布しているもので、数値標高データを立体地形モデルに変換し、任意の視点からの地形透視図を作成できるソフトウェア。